

ナラティブにおける日本語学習者の「これ」「この」の使用実態

いのまた 猪股 未未 麗澤大学大学院言語教育研究科

本研究は、日本語学習者の「これ」「この+名詞句」の使用を探るため、ナラティブデータを用い、各形式の使用パターンおよび、談話での使われ方を調査分析した。その結果、ナラティブにおいて両形式は異なるパターン、用法で使われており、同じコ系であっても、学習者は異なる機能を担わせて使用している可能性が示唆された。

1. はじめに

日本語指示詞の習得研究では、日本語のコ・ソ・アの各用法の誤用や正用から、使い分けを見たものが多いが、中間言語体系を明らかにするためには、指示詞が実際にどのように使われているか観察する必要がある。猪股(2015)では、JSL 学習者対象の OPI インタビューが文字化された「KY コーパス」(鎌田 1999 参照)から指示詞の使用を調査した。その結果、「この+名詞句」は特定の使用傾向が見られなかったのに対して、「これ」は、初級では無助詞でトピックとして使用され、上級では談話の中で「これ ϕ /は/が \sim けれども」というパターンで、「前置き」や「割り込み」などで使用されていた。ここから、同じコ系の語彙であっても、学習者は異なる機能で使用、発達させている可能性が示唆された。中でも、上級以上の「これ ϕ /は/が \sim けれども」というパターンで談話構成に関わる機能を担わせた使用については、学習者が、一つの「構文(construction)」(Goldberg 1995)としての機能を担わせる形で使用している可能性があることを指摘した。ただし、これはインタビュー場面の発話のみの結果であり、他の場面での発話も調査する必要がある。

そこで、本研究では、ナラティブデータ(文字のない絵本“Frog, Where are you?”(Mayer, 1969)を見て、自由に発話したもの)を用い、「これ」「この+名詞句」の使用を調査した。用いたデータは、千葉県で日本語を専攻している留学生 20 名(中国・台湾 16、マレーシア 2、タイ 2)の発話データである。対象者は学部の 2 年生(18 名)と 3 年生(2 名)で、全員日本で 3 年以上の日本語学習歴があり、20 名中 18 名が N2 または N1 を取得している。

表1. 「この+名詞句」
使用パターン

後続	使用数
は	16
を	11
が	9
ϕ	5
に	5
から	4
で	2
。	1
以外は	1
って	1
に対して	1
も	1
合計	57

2. 結果・考察

「これ」の使用例は 19 例、「この+名詞句」は 57 例だった。「この+名詞句」の使用パターンをみると(表 1)、最も多く使われていたのは「<この+名詞句>は \sim 」で、16 例であった。次いで多くみられたのは「<この+名詞句>を \sim 」で、11 例あり、トピックでも、目的語でも「この+名詞句」が使用されている。その他、数は少ないながらも、全部で 12 種類のパターンで使用がみられた。このことから、学習者は「この+名詞句」を文中の様々なところで使うと考えられ、生産的に使用している可能性が示唆された。「この+名詞句」の使われ方を見てみると、(1)のように、先行文脈で提示された対象に対し、「この」が使われていた例が多く、57 例中 49 例であった。また、先行文脈で提示されていないものに対する使用も少数見られたが、いずれも物語を話す流れの中で使われていた。

- (1) えー、ある所に、えー、ある男の子がいて。あの一、男の子は、ペット、犬1つと、カエル1つ。(講師：うん)そして、この男は、と、この男のペット、犬?ととも、このカエルに対して、好きな気持ちがたまらないです。(学習者 F)

表2.「これ」使用パターン

後続	使用数
φ	16
は	2
のN。	1
合計	19

一方、「これ」で使われていたのは、「無助詞(φ)」、「は」、「の」の3種類のみであり、中でも、無助詞でトピックとして使われるものが19例中16例を占めていた(表2)。使い方を見てみると、後続に疑問詞を用いているものや疑問形で使われているもの(2)が19例中11例と、半数以上であった。これらは、絵本に描かれた対象の呼び方がわからず、その対象を指し、眼前指示で使用していたと考えられる。

- (2) で、途中は、あー、男の子が、えっと、シカの、つ、つ、つ、先生、これは何ですか。(学習者 G)

(2)のような「これφ(/は)～」パターンでの眼前指示での使用は、先行文脈から独立している。また、この言語化できないものを指し確認する際の使用は、物語を叙述するという全体の流れからも独立しており、このような使い方は、「この+名詞句」では見られなかった。このことから、ナラティブにおいても、学習者は「この+名詞句」と、「これ」に異なる機能を担わせて使用していると考えられる。また、物語を述べるという全体の流れから独立した、「これφ(/は)～」パターンでの眼前指示での使用は、談話の流れを区切るという点で、KY コーパスにおける上級以降の英語母語学習者の「これφ/は/が～けれども」パターンでの「前置き」「割り込み」機能での使用(猪股 2015)と関連がうかがえる。

3. まとめ

結果から、「この+名詞句」は様々な助詞とともに、物語の流れの中で使われているのに対し、「これ」は、ほとんどが「これφ(/は)～」パターンで、眼前指示で、物語を叙述する全体の流れから独立して使用されており、ナラティブにおいても、学習者は「この+名詞句」と「これ」では異なる機能を担わせて使用していることが明らかになった。中でも、「これ」においては、「これφ/は～」というパターンに概括的意味を持たせて使用していると考えられ、猪股(2015)の上級の「これφ/は/が～けれども」の使用と同様に、学習者がこのパターンを「構文(construction)」として使用している可能性が示唆される。また、本研究で見られた「これφ/は～」パターンの使用は、猪股(2015)の、KY コーパスの初級の英語母語学習者に見られた「これ」の無助詞での使用と、トピックとして使用している点で使い方に関連性が見られ、上級以降の「これφ/は/が～けれども」の「前置き」「割り込み」での使用とも、談話の流れを区切るという点で、関連性がうかがえる。このことから、学習者は、初めのうち「これφ/は～」という構文(construction)で、眼前指示など、何かを指すものとして先行文脈とは独立して使用していく中で、「これ」の概念が抽象化していき、やがて「前置き」や「割り込み」などの談話を操作する機能へと発達させていくと考えられる。

4. 引用文献

猪股来未(2015)「KY コーパス英語母語の学習者における日本語指示詞の習得過程—「これ」「それ」、「この」「その」各形式の使われ方を中心に—」『言語と文明』13, 47-66, 麗澤大学大学院言語教育研究科

Goldberg, A. (1995). *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. IL: University of Chicago Press.